

ホメーロスとアナクシマンドロス

——モイラ概念と自然哲学——

中西裕一

一

一般に、イオニアの自然哲学の起こりは、神話的世界観から、合理的世界観への転換という観点から、説明されるのが常である。また、J・バーネットも、主著において「イオニアの科学の源を、神話的観念の中にさがし求めることは、つまらぬことである。」⁽¹⁾として、神話的諸概念と自然哲学の諸概念の内的関連性を否定している。

他方で、F・M・コーンフォード⁽²⁾は、むしろ、自然哲学の諸概念とホメーロスやヘーシオドスの中で用いられる諸概念との関連性を探ろうとする立場をとっている。

この小論では、後者の立場を参考にしながら、主にホメーロスの『イーリアス』とアナクシマンドロスの宇宙論を比較し、それ

らの内的関連性を探るための基礎的な考察を行うものである。

二

ホメーロスの『イーリアス』においては、神々は多くの英雄たちの行動と係わりをもつ。たとえば第一巻の冒頭における、いわゆる「アキレウスの怒り」はアポロンの神によるものである。また、アポロンの矢に苦しむアカイア方の軍勢の名だたる戦士たちを、集会へと召集したアキレウスの行動も、女神ヘーレーによるものである。⁽³⁾ またアガメムノーンが、アキレウスの妾であるブリセーイスを奪おうとした時、剣を抜こうとするアキレウスが、その手を止めざるをえなかったのも、やはりヘーレーによるものであった。⁽⁵⁾ すなわち、ホメーロスにおける人間たちは、神々の意向に左右されて、その行動を規定されることが多いと言えよう。

また、神々は人間のその時々⁷の行動のみならず、その属性をも規定する。やはり、第一巻で、アガムノン⁸はアキレウスに向かつて、その強さは、神が与えたものであることを強調する。

ところで、このような人間の行動や属性を規定する、いわば本体のようなものをホメーロスでは「モイラ (moira)」という言葉で表している。すなわち、ここでは英雄たちの行動や属性は「モイラ」によって規定されて、その日々を送ることになるのである。

さて、この「モイラ」は、ホメーロスにおいては実に多様な意味をもっている。まず、最も基本的な意味としては(一)部分、分け前、割当ての意であり、更に(二)分限、相応、(三)運命、定め、(四)死の運命、(五)生命の長さ、などの意味で用いられる。また、「モイラ」は、他に「モロス (moros)」「(運命、死)や」「アイサ (aisa)」「(天命、運命)などと同義で用いられている。また、時には「ケール (keel)」「(死の運命)などと同義で用いられることがある。

三

さてつぎに、この「モイラ」と神々との関係については、どうだろうか。『イーリアス』第十九巻の終わりの部分に、神馬クサントスが、ヘーレーのちからによって、アキレウスにいよいよ最期が近づいたことを、知らせる場面がある。そこでは、アキレウスに向かつて、「あるお偉い神様と容赦ない定め(モイラ)のため」死をうけいれねばならないことが告げられている。ここでは、「モ

イラ」は神と併置されており、所謂神々が定めた運命という意味に、理解することができにくい。すなわち、ここでは、「モイラ」は人間を支配すると共に、神々と同列の位置にあると考えねばならない。

また、『イーリアス』第八巻には、御父神ゼウスが、アカイア方とトロイア方のどちらに、勝利がもたらされるかを、秤に託す場面がある。ここでは、神が双方を秤にのせて、その真中を執りあげると、アカイア軍方の運命の日がくだった、とある。すなわち、ゼウスの秤は、ゼウス自身の意志とはまったく関わりなく、必然的にその重さに従って傾くことになる。ここでは、神の意志は反映されず、主神ゼウスですら、運命を定める力を持たないのであり、かえって、それに従わねばならない。すなわち、「モイラ」は神々でさえも変えることはできないものである。

さらに、他の個所をあげれば、主神ゼウスは、我が子サルペードーンがパトロクロスに殺される定めにあることを知り、思い悩んだすえに、我が子を戦場から、遠くリュキエーの地へ隠そうと企むのであるが、もう疾うから死ぬ運命に決まっているのに、なんと(10)いうことをされるのでしようと、女神ヘーレーにたしなめられるのである。

このようなことから、ゼウスをはじめとする神々は、「モイラ」をその支配下におくことはないのであって、ゼウス自身はそれをむしろゼウスの權威ゆえに忠実に従い、他の神々にもその範を垂

れる必要もある場合を、考えねばならない。すなわち、ここでは神々にもある決まった分限があり、その域においてのみ、その力を發揮しうることになる。すなわち、「モイラ」は神々の定めでもありうることになる。そして、それは個々の神々の持つ守備範囲のようなものであろう。

四

神々も「モイラ」に従うとすれば、すべてはその「モイラ」によって決定されると考えることができるわけである。しかしそれも、次の様なことから、疑問を持たざるをえないのである。すなわち、『イーリアス』第二十四巻において「神々が運命の糸を紡がれた」という表現に出会う。ここで用いられる「紡いだ」という表現の意味は、いわゆる運命を「定めた」の意味になり、神々が運命を決定しうる可能性を読み取ることができるといえる。そのような意味で、ホメーロスでは「ゼウスの運命」あるいは「神の定め」という表現がよく用いられるのである。

また、『イーリアス』第十六巻では、トロイア軍と戦うアカイア方軍勢が、劣勢の戦いの最中に、奇しくも「定めを超えて」優勢を占めたことが、述べられている。⁽¹³⁾ この「定めを超えて」という表現は、人間の自発的な行為が運命を乗り越えることを、示していると考えられる。そうであるとすれば、人間は、あるとき運命に逆らい自らの意志のみに従って、行動できる場合があること

になる。

そこで、更に次の様な原典を引こう。⁽¹⁴⁾

「やれやれ、一体まあ何として人間どもは神々に、責をさせ
るのか、災禍はみな、わしらのせい做起るのだという。と
ころが実は自分ら自身の道に外れた所業ゆえ、定めを超えて
難儀をするのに。」

ここで用いられている、「定めを超えて」という表現は「運命」であるよりはむしろ、道徳的な意味であると言える。従って彼等は単に運命をのりこえたのではなく、いわば道徳的な規範のようなものを、逸脱して行為に及んだということになる。すなわち「モイラ」が、道徳的な意味を含みうるものであるから、単に「運命」という意味のみにとらわれることなく、更に広い意味を含む概念としてとらえなければならぬことになる。ここでは、人間の「分限」を表し、それを逸脱したことを示している。ここでは、神々にとってもその「領分」、「分限」があり、それを超えることは許されないのである。すなわち「モイラ」はここでは、純然たる道徳的概念として用いられている。だから、「定めを超えた」行為がなされると、その逸脱行為は、すぐ後に続く復讐によってしっかりと正されることになる。⁽¹⁵⁾

五

さて、それでは「モイラ」の意味については、どのように理解

すべきであろうか。まず「モイラ」の原義の「割当て」、「分前」という意味にもとづく、「神々のモイラ」は神々の領分、つまり支配の及ぶ範囲を意味する。ホメーロスにおける神々は、一定の限界（それは、支配の及ぶ範囲という意味であるが）をもつことになる。従つて「モイラ」はよりいつそう空間的な概念に近いものであると考えることができる。また人間たちの「モイラ」は、一方では神々によつて定められた運命であるとともに、他方において人々の分限を示す。しかし、人間はその分限を、しばしば逸脱し、ふるまうことがある。それが先の「定めを超えて」の意味であろう。

「モイラ」は人間たちにも、また神々に対しても、それを規制するものとして、存在する。それは神々の領分をあらわすとともに、人間の道德的な規範をも、意味する場合がある。したがつて、「モイラ」は神そのものでもない。一般に、古代ギリシアの神々は、宇宙生成の原理のもとに従属し、ある限界（モイラ）を与えられ、いわば空間的ななわばりを持つことになる。はじめにカオスがあり、その後、いろいろな領域における神々の役割が、次々と定められた、とみるべきであろう。

このような、運命性と道德性を意味する二面性を持った「モイラ」という言葉を理解する手がかりとして、次のヘーシオドスの言葉が参考になる。

「自然の歩みは、決して善悪を見落とすことはない。」⁽¹⁷⁾

すなわち、自然の必然的な歩みとしての運命の概念と、人間の道德性の根拠となるものの概念との間に、いわば未分化的な状態があり、現代的な観点からすれば、混用されていると見る以外には、理解するてだてがなくなつてしまふのではないか。この点に關して、コーンフォードは「自然は道德である。それゆゑ、自然の秩序は人の罪によつて乱されるのである。」と述べている。

六

ところで、コーンフォードは、イオニアの自然哲学とホメーロスの「モイラ」の概念との間に類比的な特徴を見ようとして、次のアナクシマンドロスの有名な断片を引用している。これを、パーネットの解釈に基づき解釈すると、つぎのようになる。⁽¹⁸⁾

「存在するものどもは、それがそこから生じてくるそのものへと、消滅してゆく。『必然の掟に従つて。』というのはそれが、時の流れにもとづき、相互に不正の報いをうけ、そしてその償いをするからである」と（アナクシマンドロスは）幾分詩的な表現を用いて語っている。」

アナクシマンドロスにおけるアルケーは、周知のごとく、「アペイロン（無限定）なもの」である。そのアペイロンな状態は、あらゆる存在物の原初的な姿を示す。すなわち、アルケーとは、あらゆるものが、その出発点において、何であつたかを示すものである。そして、そのアペイロンなものが、様々なものへと、区

別される最初の段階こそ、四元素であることになる。その過程は、まずアペイロンから、暖、冷の状態が生まれ、さらに乾、湿が生まれる。次いでそれらに対応するよりに火、土、空気、水の元素が生じる。さらにそれらは、太陽、大地、風、海となって自然物として、われわれの眼前に広がるのである。そしてそういった過程そのものを、不正な営みとしてアナクシマンドロスはとらえたと考えられるのである。そして、一度自然物として、限定されたものも、永遠にそのものであり続けることはない。それらは、やがて再びアペイロンなものへと戻ってゆく。その過程をアナクシマンドロスは、まさに「償い」と表現するのである。

さて、以上の点から次の二つのことが、確認されねばならない。第一点は、「不正」、「償い」という表現にかかわることである。

ヨーンフォードは「初期の哲学者は、世界の秩序を、道徳的なもの、正しいものとみている」と語っている⁽²⁾。すなわち、世界の起源であるアペイロンの状態こそ、もともと自然な状態であり、自然はその状態にある限り「正しい」ことになる。しかしそのアペイロンな状態から、各元素に分かれたとき、アペイロンな状態は否定される。それゆえ、各元素への分化は、「不正」である。ところで、自然の本性的な流れに従って、限定されたものは、漸次そのかたちを失い、ついには消滅する。それは、かつての「不正」から、再びもとの姿に戻る「償い」の過程である。こういった帰帰的な過程において、ものの生成、消滅がとらえられているので

ある。

第二点については、先に若干述べたが、いわゆる「アルケー」の意味についてである。所謂万物の構成要素として「アルケー」をとらえた場合アナクシマンドロスの考えを充分にとらえることができないのではないか。端的に示せば、「アペイロンなもの」は、万物の構成要素ではなく、万物がその始まりにおいて何であったかを、さしていると考えるべきだろう。

七

さて、ここで「モイラ」とアナクシマンドロスの宇宙生成論との関わりについて、考えてみよう。まず「アペイロン」なる状態が、最初にあつて、それは諸元素へと分けられてゆく。あるいは諸元素という枠組を与えられる。しかし、それは「必然の掟に従って」、またもとの「アペイロン」へと引き返してゆかねばならない。そして、この「必然の掟」から逸脱すること、すなわち「アペイロン」の状態から限定をうけ、諸元素が生まれることを、不正とみて、再び「アペイロン」へもどることを、償いとみている点は、ホメーロスの「モイラ」の構造と、ある部分で基本的な類似性をもつと考えられる。すなわち、ホメーロスにおける「モイラ」は、いわゆる「運命」の概念としても、また人間の道徳的な規範性をあらわす概念としても用いられることが、既出のテクストで確認されている。また、アナクシマンドロスの自然哲学にお

いては、所謂道徳的な意味の概念が用いられる点について、その意味付けがどのようになされるかを、考えねばならないという問題もあるだろう。その点からも、アナクシマンドロスの「不正」、「償い」という表現の意味するところは、ホメーロス「モイラ」の概念のもつ意味を念頭においてこそ、理解できるものであろう。逆に、ホメーロスの「モイラ」も単なる「運命」という意味では処理できないという問題点も、説明されるのではないか。このように、必然的な自然の流れは、それ自体として、善悪の区別を、同時に含むかたちで、とらえられるということは、未だこれらの基本的な区別がなされない、未分化の状態であったことも、想定させる。ともあれ、こういった神話的概念と自然哲学の概念との関連性を探り、双方を比較論的に検討することにより、それぞれを持つ意味をより深く理解できる可能性がある。また広くは、イオニアの自然哲学の発生の問題にも、新たな光を期待できるだろうし、ホメーロスの作品そのものの、解釈の新たな道を開くことにもなるだろうと思われる。

八

さて、ここで最後に、これまで述べてきたこれらの思想の比較論的考察の要点を確認するため、その骨子をまとめ、この小論を結ぶことにしよう。

まず、ホメーロスにおいて「モイラ」は神々の領分として、い

わば空間的な意味に用いられる。それを、アナクシマンドロスの表現すれば「アペイロン」な状態から、四元素の確定という方向がそれである。しかし、再び「アペイロン」にかえてゆく過程はアナクシマンドロスにはあつても、ホメーロスの中には見いだせない。つまり、ホメーロスでは、いわば下降の世界のみが描かれている。

従つて、「モイラ」の概念は、所謂運命と考えることはできないことから、神々との関わりを超えた、さらに広い意味で用いられていると考えられ、むしろコスモゴニーの概念に近いものとなければならない。その点では、アナクシマンドロスの「必然の掟」と符合する。

アナクシマンドロスの「必然の掟」においても、ホメーロスの「モイラ」においても、運命（必然）という意味と、道徳的な規範性の意味とが混用され、それらの意味がいわば未分化であると考えねばならないこと、すなわち、ホメーロスでは「モイラ」が「運命」の意味にも、「道徳的な正当さ」の意味にも用いられ、アナクシマンドロスでは「アペイロン」な状態から、四元素に分化する方向を「不正」とし、再び「アペイロン」な状態にもどることを「償い」としている。これらの点は類比性をもつ。

しかし、「不正」が「必然の掟」によつてなされたかどうかは、この断片だけでは確認できない。すなわち、個々の元素が、何故生まれるに至ったかは、明らかにされてはいない。

「モイラ」のしくみと、アペイロンな状態からの四元素の確定の過程を類比的にみるならば、「アルケー」の意味を、所謂万物の出発点とみなければならぬ。つまりものが、その始めの状態として、なんであったかを示すものが、「アルケー」である。

また、ホメーロスの神々の領分という概念も、イオニアの自然哲学のアルケーからものが生まれてくる過程も、共に、限定されないものから、限定される過程として、類比的に考えることができると思われる。

ところで、これらの考察は今後更に、同種の概念としての「チャケ」などの意味も、比較検討し、考察してみる必要があろうが、それについては、今後の研究課題としたい。

- (1) J. Burnet, *Early Greek Philosophy*, 4. ed., London, 1930, p. 13.
- (2) F. M. Cornford, *From Religion to Philosophy*, Cambridge, 1912, chap. 1.
- (3) Hom., *Il.* I, 8~9.
- (4) *ibid.*, 53~56.
- (5) *ibid.*, 194~6.
- (6) *ibid.*, 176~8.
- (7) *μολοα*.
- (8) Hom., *op. cit.*, XIX 403~410.
- (9) *ibid.*, VII 66~72.
- (10) *ibid.*, XVI 440~442.
- (11) *ibid.*, XXIV 525~526.

- (12) *επεικλιόσαστο*.
 - (13) Hom., *op. cit.* VII, 66~9.
 - (14) *ibid.*, *Odyssey* I, 32~7.
 - (15) *ὄρεθ μολοαυ*, *ὄρεθ αἰόσασυ*, *ὄρεθ μοπόυ*.
 - (16) 例え、悲劇などを例にとると、そこでは運命と道徳的問題と区別しがたいと思われる部分によって、成り立っているというように着目した。
 - (17) Hesiodos, *Theogonia* 116.
 - (18) F. M. Cornford, *op. cit.*, p. 34.
 - (19) J. Burnet, *op. cit.*, p. 52.
 - (20) cf. F. M. Cornford, *Principium Sapientiae*, Anaximander's System.
 - (21) F. M. Cornford, *From Religion to Philosophy*, p. 35.
- (なかにし・ゆういち) キリシマ思想史、日本大学助教授